

大豆管理情報 (第2号)

令和5年7月14日
農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月下旬の平均気温は、19.3℃と（対平年差+0.3℃）と平年並であった。
6月の平均気温は、22.7℃（同+1.3℃）と平年に比べかなり高かった。
7月上旬の平均気温は25.8℃（同+1.6℃）と平年に比べ高かった。

(2) 降水量

5月下旬の降水量は、83.5mm（対平年比231%）と平年に比べかなり多かった。
6月の降水量は、213.0mm（同123%）と平年に比べ多かった。
7月上旬の降水量は105.5mm（同113%）と平年に比べ多かった。

(3) 日射量

5月下旬の平均日射量は、17.8 MJ/m²/日（対平年比93%）と平年に比べ少なかった。
6月の平均日射量は、17.9MJ/m²/日（同103%）と平年並であった。
7月上旬の平均日射量は、16.3MJ/m²/日（同105%）と平年並であった。

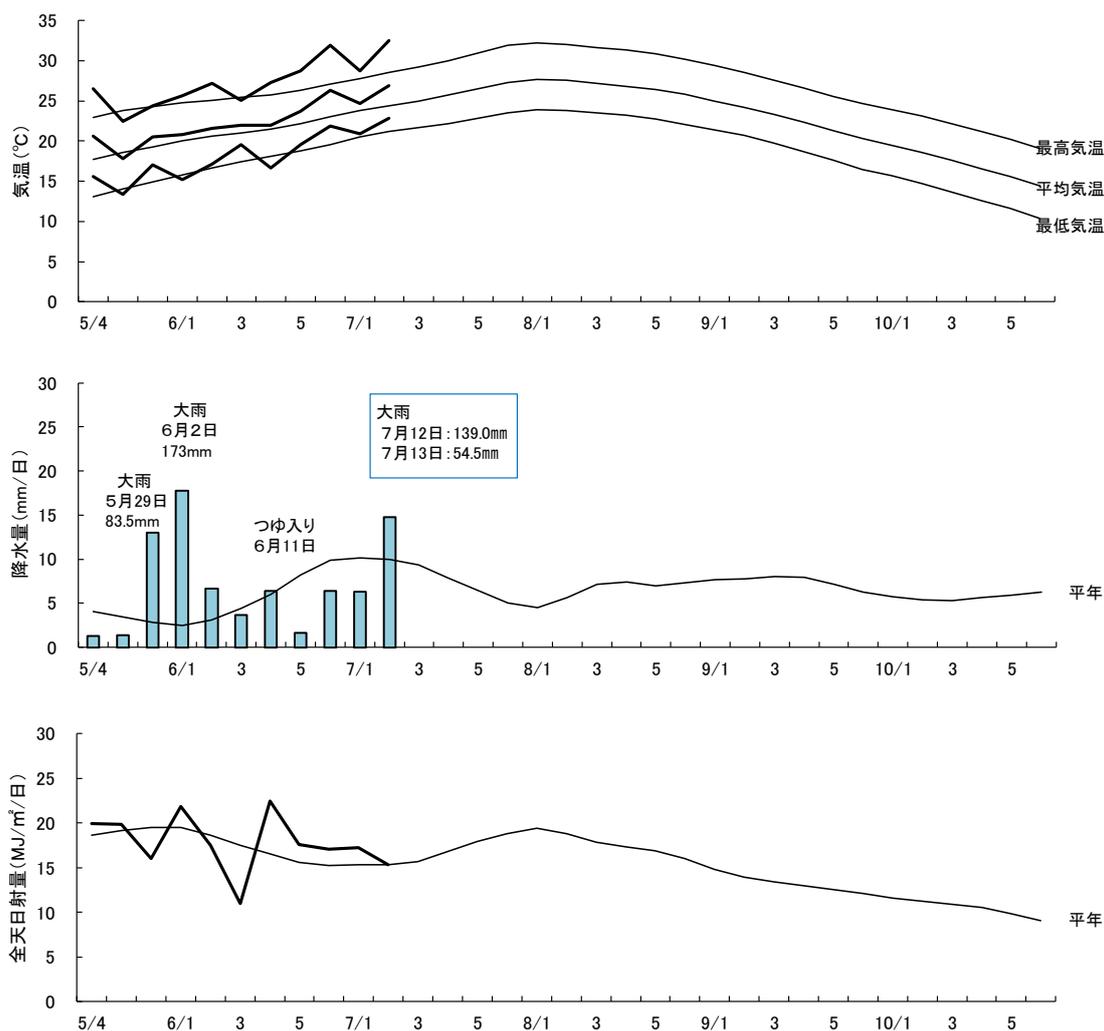


図1 令和5年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育経過（生育観測ほデータ）

(1) エンレイ（単作）

単作は、主茎長 39.9cm、本葉葉数 7.1 葉、一次分枝数は 0.4 本であった。
 平年に比べ主茎長は短く、本葉葉数は少なく、一次分枝数は 0.4 本少なくなっている。
 開花はまだ見られていない。

(2) エンレイ（麦あと）

麦あとは、主茎長 42.1cm、本葉葉数 7.6 葉、一次分枝数は 0.8 本であった。
 平年に比べ主茎長はかなり長く、本葉葉数は多く、一次分枝数は 0.3 本多くなっている。
 開花はまだみられていない。

(3) シュウレイ

主茎長 32.3 cm、本葉葉数 5.9 葉、一次分枝数は 0.7 本であった。
 開花はまだみられていない。

表 1 大豆生育観測ほ調査結果（7月14日現在）

品種	年度	播種月日 (月日)	栽植本数 (本/㎡)	主茎長 (cm)	本葉葉数 (葉)	一次分枝数 (本)	開花期 (予想)
エンレイ	単作	R5	17.4	39.9	7.1	0.4	—
		R4	16.3	57.5	9.9	1.0	7月19日
	平年	16.4	49.8	8.8	0.8	7月17日	
	平年比・差	8	106	80	-1.7	-0.4	—
エンレイ	麦あと	R5	16.5	42.1	7.6	0.8	—
		R4	17.7	41.6	7.6	0.4	7月23日
	平年	16.7	35.1	6.6	0.5	7月22日	
	平年比・差	-1	99	120	1.0	0.3	—
シュウレイ	単作	R5	13.0	32.3	5.9	0.7	—
		R4	15.5	43.9	7.8	0.8	7月21日
	平年	15.3	37.9	6.6	0.5	7月22日	
	平年比・差	6	85	85	-0.7	0.2	—

注) 調査ほ場数: エンレイ(単作5、麦あと3)、シュウレイ(単作3)

注) 平年値はH25~R4

注) 平年比(差): 栽植本数、主茎長は平年比、播種日、本葉葉数、一次分枝数は平年差

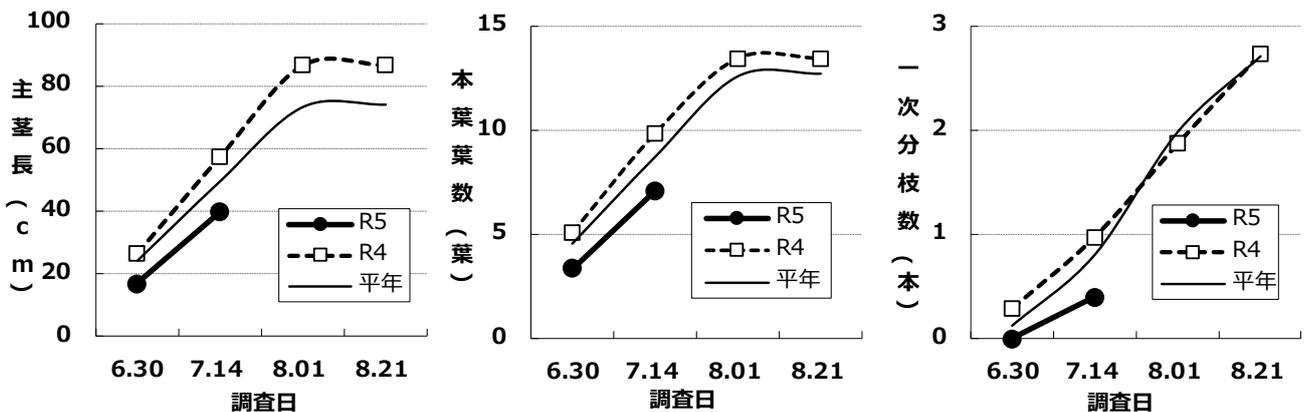


図 2 単作エンレイの生育の推移

3 当面の技術対策

- ・ 額縁排水溝や排水口の点検、溝の手直しを行い、排水対策を徹底する。
- ・ 生育量を確保するため、2回培土が完了していない場合は、晴れ間をみて速やかに行う。
- ・ 開花期以降、晴天が3日以上続くと見込まれる場合は、積極的に畦間かん水を行う。
- ・ 残草が多い場合は、雑草の種類や葉齢に応じて茎葉処理除草剤を適切に使用する。

(1) 溝の手直しや連結等による排水の徹底

- ・ ほ場内にある停滞水を速やかに排出する。
- ・ 降雨後の排水や畦間かん水時の入排水をスムーズにする。

(2) 2回培土を実施

- ・ 生育量の確保と雑草の発生を抑制するため、2回培土が完了していない場合は、ほ場条件を確認し、晴れ間をみて速やかに行う。 なお、作業は丁寧に行い、株元までしっかりと土をかける。

(3) 開花期以降の畦間かん水の実施

- ・ 開花期以降、3日以上晴天が続くと見込まれる場合は、積極的に畦間かん水を行い、莢数の確保を図る。
- ・ かん水は短時間で実施し、ほ場全体に水が行き渡ったら水口を閉めて速やかに排水する。



写真1 畦間と額縁排水溝を連結し、排水を促進

【畦間かん水の効果】

① 莢数の確保

- ・ 落花・落莢の防止
(青立ちの発生防止)



ちりめんじわ粒

② 百粒重の増加

- ・ 根の養水分吸収量の増加
- ・ 光合成の促進
- ・ 根粒による窒素固定能の維持



茶色のしみ状斑紋粒

③ 品質の向上

- ・ ちりめんじわ粒の発生防止
- ・ 茶色のしみ状斑紋粒（高温に伴う物理的損傷）の発生防止

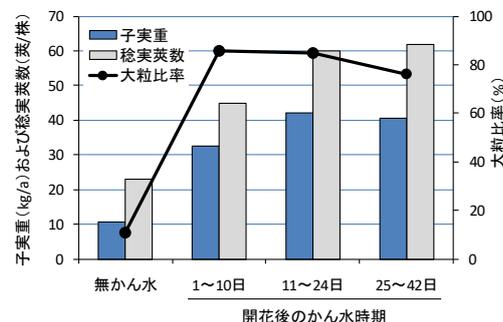


図3 かん水時期と収量の関係 (H14 農試)

(4) 病虫害防除

ア 茎疫病

- ・ 7月12日からの大雨による冠水で多湿条件となったほ場では、発生が助長される。
- ・ 生育初期に発病しやすいため、播種時期が遅いほ場は特に注意する。
- ・ 常発地や冠水したほ場を巡回し、発生が認められた場合は、直ちに地際部を中心に「Zボルドー粉剤DL」や「フェスティバルC水和剤」等を散布する。

イ ウコンノメイガ

- ・ 生育の旺盛なほ場や葉色が濃いほ場で多発する傾向がある。
- ・ 7月6半旬に幼虫による葉巻を確認し、1株当たり平均6個以上の葉巻があれば、速やかに「ダントツH粉剤DL」や「プレバソンフロアブル5」等で防除する。

ウ 葉焼病

- ・ 強風雨で蔓延し、多発すると収量、品質が低下する。
- ・ 発生初期に「Zボルドー」等で防除する。シュウレイは発病しやすいため7月下旬頃に予防的に散布を行う。

(5) 雑草防除の徹底

- ・雑草が多い場合は、①雑草の種類や葉齢、②大豆の生育状況に応じて除草剤を適切に使用する。
- ・難防除雑草（帰化雑草等）が発生するほ場では、雑草種類に応じて効果の高い除草剤を選定し、雑草が大きくなる前に防除を行う。
- ・帰化アサガオ類が発生するほ場では、つる化する前（6葉期前）防除を行う。また、除草剤散布後も発生がだらつくため、大豆の草高と同じになるまで継続して防除する。
- ・ほ場周辺（畦畔、農道等）で難防除雑草の発生がみられる地域は、開花・結実前に防除（非選択性茎葉処理剤、地際からの刈取り）し、まん延を防止する。

表2 大豆生育期処理除草剤

種類	適用雑草	除草剤名	使用方法	使用時期			使用回数	除草効果についての留意点	
				時期	雑草の生育ステージ等	収穫前日数			
選択性除草剤	1年生イネ科雑草	ナブ乳剤	雑草茎葉散布	全面散布	雑草生育期	イネ科雑草3～5葉期	30日前まで	1回	<ul style="list-style-type: none"> ・適用雑草としてスズメノカタビラを除く。 ・広葉雑草及びカヤツリグサ科には効果が期待できない。
		ワンサイドP乳剤			雑草生育期	イネ科雑草3～5葉期	60日前まで	1回	
		ポルトフロアブル			雑草生育期	イネ科雑草3～10葉期	30日前まで	1回	
	1年生広葉雑草	大豆バサグラン液剤			大豆2葉期～開花前	雑草の生育初期～6葉期	45日前まで	1回	
アタックショット乳剤		大豆2葉期～開花前			雑草生育期	45日前まで	1回	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒユ科、ナス科、スペリヒユ、イチジ、帰化アサガオ類以外の一年生広葉雑草には効果が劣る。 ・イネ科雑草には効果がない。 	
非選択性除草剤	1年生雑草	ラウンドアップマックスロード			畦間処理	雑草生育期	-	前日まで	
		ザクサ液剤	28日前まで						
		バスタ液剤	畦間処理	雑草生育期	-	28日前まで	ザクサとバスタをあわせて3回以内		
			株間処理	大豆5葉期以降 雑草生育期					
		ロロックス	雑草茎葉兼 土壌散布	畦間・株間処理	大豆3葉期以降 雑草生育期	雑草の草丈15cm以下	30日前まで	1回	<ul style="list-style-type: none"> ・非選択的に作用するため、大豆の本葉にかからないように散布する。 ・イネ科雑草やツククサには効果が劣る。
	1年生広葉雑草	タッチダウンiQ	雑草茎葉塗布		雑草生育期	-	7日前まで	2回	<ul style="list-style-type: none"> ・専用器具を使用する。 ・塗布処理場所は茎とし、大豆の草冠より上の10～15cm部分に行う。

吊り下げの専用ノズルを使用する

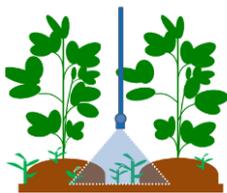
吊り下げの専用ノズルを用いた散布のポイント	畦間処理 ※大豆にかからないよう注意	畦間・株間処理 ※大豆の本葉にかからないよう注意
<ul style="list-style-type: none"> ・大豆や雑草の大きさ、処理方法によってノズルの高さや角度を調整する。 ・雑草全体に除草剤が十分に付着するように散布する。 		



写真2 つる化し始めたマメアサガオ